

「男、突っ走る！」

第73回

第一稿

作・壽倉 雅

登場人物

藤田昇平	熊瀬怜奈	山森直海	橋崎俊悟	田所子臣	本村敦夫	山枝佐代子	国中	木内健次郎	木内真保	木内孝志	木内雅也	『オフィスツリーイン』代表
(21)	(17)	(18)	(48)	(62)	(54)	(43)	(58)	(19)	(50)	(52)	(23)	
オーディション参加者	オーディション参加者	オーディション参加者	WEB会社社長	市民映画プロデューサー	音楽プロデューサー	劇団主宰者	市民映画プロデューサー	雅也の弟	雅也の母	雅也の父		

1 木内家・居間（朝）

雅也、孝志、真保、健次郎が朝食を食べている。

雅也「とうとう健も、今日から社会人か」

健次郎「おお」

真保「何とか就職先決まって良かったわよ」

孝志「名古屋の高校に、うちの地元の会社の

求人が来てるなんて、運が良かったんだよ。

（と健次郎に）これからがスタートなんだ

から、頑張れよ」

健次郎「はいはい」

孝志「そろそろ行くか」

真保「健、駅まで送ってって」

孝志「はいよ」

健次郎「じゃあ、行ってきます」

雅也「頑張んなさいよ」

孝志「行ってきます」

出ていく孝志と健次郎。

真保「そういうあんたも、今日から二年目か」

雅也「何とかね。早かったよ一年」

真保「確定申告も、もう済ませたんでしょ」

雅也「もちろん。商工会の人が丁寧に教えてくれたから、スムーズにできた」

真保「元々高校で情報の勉強もして、ITパ
スポートも取ったんだもん、大体のことは
分かるでしょ」

雅也「そうでもないよ。勘定項目とか、貸方
と借方とか、調べてもよく分かんないこと
は全部、商工会の経営指導員の人に教えて
もらった」

真保「岐阜のじいちゃんも、そんな風に一人
で何十年とやってきたんだらうね」

雅也「その隔世遺伝があるんでしょ」

真保「かもしれないわね」

雅也「間違いない」

真保「あ、そういえばこの間の表敬訪問、新
聞に大きく載ってたから、そこだけ切り抜
いて保存してあるから」

雅也「そんなことしなくても良いのに」

真保「だって記念だもん。市長や市議会の人

と一緒に映るなんて、そうそうないことでしょ」

雅也「ねえ、その新聞記事、コピーして良

い？」

真保「何、配るの？」

雅也「営業資料として使うの。フリーペーパーの営業の時、市長への表敬訪問に行ったこととその新聞記事を渡したら、信用にもつながるでしょ」

真保「どんな頭の中してるんだか」

雅也「春号が終わって休んでる暇なんてないの。夏号の準備に、そろそろ取り掛からないと。特集記事とか連載小説とかは、ギリギリでも良いかもしれないけど、まずはスポンサーを集めないと、フリーペーパーっていうのは作れないんだから」

呆気にとられている真保。

2 同・雅也の部屋

雅也がパソコンで仕事をしている。

N 「二〇一八年の四月を迎え、世間では新年度が始まりました。弟の健次郎は地元の製造工場で就職が決まり、今日から社会人としての生活がスタートし、僕も個人事務所開業から何とか二年目を迎えることができました。二年目の春を迎えたとはいえ、相も変わらずシニア向けフリーペーパー『ふれいす』と地元のフリーペーパー『デイズ』の二つの掛け持ちをしております、当然それだけではなく、新規顧客獲得のために名古屋の異業種交流会まで出向くなどの営業活動も続けていました」

3 中央交流センター・ラウンジ

N 「その一方で、市民ミュージカルの『スリジェネ』の準備も、いよいよ来週四月二十日金曜日から二十二日日曜日の三日にかけて開催されるオーディションに向けて、話が決まりそうなところでした」

雅也、佐代子、山中、本村、田所、橋

崎が書類を見ながら会議をしている。

山中「何とか十人になりましたね」

雅也「金曜日十九時からのオーディションと、

日曜日の十三時からのオーディションに集

中してて、土曜日十三時の希望者は今のと

ころいませんね」

田所「飛び込みで来る人もいるから、一応土

曜日も予定通り会場で準備はしないとね」

佐代子「あ、浩太来てくれるかな」

雅也「浩太？」

佐代子「市民映画に出演してくれた子。多分、

木内君とそんなに歳変わらないと思う」

田所「それなら、麻美ちゃんも来てくれるか

な」

佐代子「ああ、あの子なら演技力もあるもん

ね」

雅也「その麻美さんっていう人も、市民映画

に？」

田所「うん。それに、名古屋の舞台に何回も

出演してる。普段は大学生なんだけどね」

雅也「経験者がいたほうが、まあスムーズで
すもんね。それに、国枝さんの気心の知れ
てる人のほうが」

佐代子「まあね」

本村「（資料を見ながら）とりあえず金曜日
に来るのは、大学生の藤田君って子と、高
校生の山森さんと熊瀬さんか。三人ともす
ごいね、藤田君は名古屋の劇団の公演に何
度も出演してて、山森さんは現役で高校の
演劇部に属してて、熊瀬さんは五歳から詩
吟やってるんだ」

橋崎「見事に、何かしらの経験をしてる子ば
かりですね」

雅也「やっぱり、市民ミュージカルとは言っ
ても、経験者に偏っちゃうんですかね」

佐代子「まあ、興味があったりミュージカル
が好きっていうのと、そこに自分が出たい
っていうのは別だからね」

本村「現状のヤマちゃんの脚本だと、六人中
三人が男子でしょ。この子は、候補して入

れておいたほうが良いかもね」

山中「まあ劇団の公演に出演経験があると言っても、演技力がどれだけあるか。舞台上に立ってても、全然実力が伴ってない人もいますからね」

雅也「そういうもんなんですか？」

山中「まあ吸収力があつたり、好奇心旺盛だつたら良いんだよ。でも、自分の中でもう正解を作っちゃって、演技が通り一遍になつててプランが全然ないと、つまらない芝居になるからね」

雅也「なるほど……」

本村「あとは、歌唱力だね。この熊瀬さんつて子は詩吟やってるから、期待して良いだろう。あとは藤田君と山森さんが、どういう風になるかだね」

橋崎「オーディションの五日前には、再確認の案内メールを全員に送る予定です」

佐代子「リマインドはありがたいです。日付を間違えちゃう可能性もないとは言えませ

んから」

雅也「いろんな子が来ますね。（と資料を見ながら）あ……」

佐代子「どうした？」

雅也「日曜日、今のところ男の人が一人で女の子が六人になってます。演技審査の時、二人で芝居するとなると、この前川さんって人が六人相手に全部芝居することになりませんか？」

山中「（資料を見て）ああ、うっかりしてたな。確かに木内君の言う通り、一人で六人ってわけにはいかないな」

佐代子「当日、スタッフのお手伝い兼ねて相手役の人、頼んでみましようか？」

橋崎「心当たりあるんですか？」

雅也「市民映画で、良い方でもいらっしやるんですか？」

佐代子「うん。はっしーに来てもらおうかな
と思っ」

本村「ああ、はっしーか」

雅也「はっしー？」

田所「橋岡直政さんって言って、市民映画荷も出てくれて、長年名古屋の劇団に所属してた方なの。アクションとか時代劇もできて、いろんな映画や舞台に出演してくれてるの」

佐代子「あ、はっしー、舞台に出てくれないかな」

山中「台本の直しはまだできますけど、はっしー、本当に出すんですか？」

佐代子「まだ本人に話すらしてないけどね」
山中「でも、日曜日のスタッフと相手役は良いと思いますよ。オーディションの後の選考会議にも参加してもらって、相手役をやった感想も参考に聞いてみたいですし」

佐代子「早速、はっしーに聞いてみます」
雅也「国枝さんは、本当にいろんな繋がりがあるんですね」

佐代子「（苦笑して）まあ、市民映画をやったからよ。あの映画の企画をしなかった

ら、今頃こんな風になってなかったと思う。
あの作品が、私にとってのターニングポイントなのかもしれない」

雅也「議事録には、一端予定で、その橋岡さんのこと記載しときます」

佐代子「よろしく」

雅也「はい」

4 同・全景（夜・二週間後）

N「そして二週間後。『スリジェネ』メンバーのオーディション一日目となりました」

5 同・会議室

審査員席に座っている佐代子、山中、本村——受付で配布資料や備品の確認をしている雅也、田所、橋崎。

佐代子「木内君」

雅也「はい？」

佐代子「ちよっと良い？」

雅也、審査員席に来ると、

雅也「はい？」

佐代子「今日さ、一緒にオーディション受けてくれない？」

雅也「え？」

佐代子「今、ヤマさんとハルさんと話してたんだけど、今日三人でしょ。橋崎さんが、オーディションの記録写真撮影してください。るんだけど、三人だと絵面的に良くないし、オーディション参加者側の意見も聞いてみたいから、サクラとして受けてくれないかな」

雅也「けど、僕歌も下手ですし、演技もできないですし、そもそも自己PR何も考えたくないですよ」

山中「PRは、アドリブで何とかなるでしょ」
雅也「なりますかね？」

本村「歌のことは気にしなくて大丈夫。あくまでオーディションなんだから。上手い下手があって当然だし」

雅也「けど、今日来る三人、名古屋の劇団の

公演に出演経験ある大学生と、演劇部に入
ってる高校生と、五歳から詩吟やってる高
校生ですよ。そこに、全くのド素人の僕
が入ったら公開処刑じゃありませんか」

山中「大丈夫大丈夫。他の参加者からしたら、
『あ、こういう未経験の人も参加してるん
だ』って思うから」

雅也「あまりフォローになってない気がする
んですけど。（と時計を見て）あ、そろそ
ろ来るといけないので、とりあえず、オー
ディションを受けに来た人を演じます」

佐代子「よろしく」

田所、配布資料と『1』と書かれた番
号札を雅也に渡して、

田所「急に重要な役回りが来たわね」

雅也「絶対、変な空気になりますって」

橋崎「やっぱり、オーディション受けること
になったね」

雅也「（ムツとして）サクラですから、あく
までも。でも、やる気ない奴って思われる

のも嫌なので、そこは真面目に受けます」

雅也、審査員席の前に並べられている椅子に座る――落ち着かない様子で、そわそわしている。

佐代子「緊張してるの？」

雅也「そりゃ急にこんな無茶ぶりされたら、

緊張しますよ……」

と、高校生・山森直海（18）が入ってきて、受付の田所のもとにやってきて、

直海「すみません。『スリジエネ』のオーダー

イシヨンに来た、山森直海です」

雅也「（呟くように）来たあ……」

田所「（名簿を見ながら）はい、山森さんです。ね。（と資料と『2』の番号札を渡して）こちら、今日の資料です。そちらの席で座ってお待ちください」

直海「ありがとうございます」

と、雅也の隣に座る――しばらくすると、高校生・熊瀬怜奈（17）が入っ

てきて、

怜奈「失礼します。オーディションに来ました、熊瀬怜奈と言います」

田所「熊瀬さんですね。（と資料と『3』の番号札を渡して）こちら、今日の資料です。そちらの席で座ってお待ちください」

怜奈「ありがとうございます」

と、直海の隣に座る――そこへ、大学

生・藤田昇平（21）が入ってきて、

昇平「失礼します。市民ミュージカルのキャストオーディションに来た、藤田昇平と言います」

田所「（名簿を見ながら）はい、藤田さん。（と資料と『4』の番号札を渡して）こちら、今日の資料です。そちらの席で座って

お待ちください」

昇平「ありがとうございます」

と、怜奈の隣に座る――田所、佐代子に目で合図を送る。

佐代子「それでは、少し早いです。今日の参

加者が全員揃ったので、早速オーディションを始めていきたいと思います。今回、この市民ミュージカルの総合プロデューサーを務める国枝佐代子と申します……」

N 「国枝さん、そして脚本・演出のヤマさん、音楽のハルさんと、審査員三人の挨拶と紹介の後、オーディションは始まりました」

× × ×

佐代子 「では、まず一番の方からお願いします」

雅也 「はい（と緊張の面持ちで立ち上がる）」

佐代子 「まずは、自己PRを一分以内で願

いします」

田所、ストップウォッチを押す——随

時記録写真を一眼レフカメラで撮影し

ている橋崎。

雅也 「はい。（とスラスラと話し始めて）木

内雅也、二十二歳です。普段は個人事業で

広告制作とライターの仕事、それから脚本の仕事をしています。僕はこれまで、映画

やドラマの脚本を担当させていただいたことはありましたが、舞台の脚本の経験は一切ありません。今回、自分自身が舞台に立つことで、舞台の勉強をし、やがては脚本に生かすことができたらと思っています。お芝居も歌もダンスも、一切経験がなく、最後に何かを演じたのは、おそらく小学校六年生の学芸会の時だと思います。演劇やミュージカルとは全く無縁の生活を送ってきましたが、これを機会にまた一つ新たな挑戦ができたらと思っています。よろしくお願いたします（と着席する）」

拍手をする一同。

田所「（橋崎に小声で）無茶ぶりにしては、随分スラスラ話し慣れてるようにやりますね。しかも、ちょうど一分」

橋崎「（小声で）さすがライター」

×

×

×

質疑応答をしている一同。

N「自己PRの後は、趣味は特技の質問をさ

れ、僕は高校の時から培ったタッチタイピングと答えたのだが、隣の隣に座る熊瀬さんと言えば……」

透き通るような声で詩吟をする怜奈——
——啞然と見ている雅也。

N 「物の見事に、五歳からやっているという詩吟を披露したのです。タッチタイピングと答えた自分が恥ずかしく思えました」

× × ×
『見上げてごらん夜の星を』を歌っている雅也。

N 「その後は歌唱審査で、僕は決して上手いとは言えない、むしろ下手の部類になる歌唱力で『見上げてごらん夜の星を』を歌うことになりました。これについても、隣に座る山森さんは……」

× × ×
美声で『見上げてごらん夜の星を』を歌っている直海——啞然と見ている雅也。

N 「僕の次ということもあり、山森さんの歌声はとても美しく聞こえました。そして、言わずもがな、熊瀬さんも……」

× × ×
部屋中に響き渡る声で『見上げてごらん夜の星を』を歌っている怜奈——啞然と見ている雅也。

N 「詩吟と同じ声量で歌うその声は、僕の鼓膜をひたすら震えさせていました」

× × ×
テスト用台本を見ながら演技をしている直海と昇平——啞然と見ている雅也。

N 「そして、最後に行われた演技審査では、藤田さんと山森さんの演技力に僕は圧倒されていました。やはり、名古屋の劇団の公演の出演歴がある人や高校演劇をやっている人は違うのだと、僕は自分が持っているはずのない演技力とのその明らかな差を感じ取っていました」

× × ×

オーディションが終わり出ていく雅也、

直海、怜奈、昇平——見送る佐代子、

山中、本村、田所、橋崎。

N「そして、一日目のオーディションが終わ
り……」

佐代子「皆さん、初日お疲れさまでした」

山中「いや、やっぱり経験者はみんなすごい
ですね」

本村「女子二人の歌唱力は間違いないね。あ
との女性陣がどれほどの歌唱力を持つて
かはわからないけど、この二人は有力候補
だな」

と、雅也が戻ってくる。

雅也「お疲れさまでした」

橋崎「サクラ、お疲れ様」

雅也「もうあんな思いするのは二度とごめん
ですよ。だから言ったじゃないですか、公
開処刑だって。あんな経験者ばかりの中
で、ポツンと僕だけ一人」

田所「でも、自己PRはぴったし一分だった

よ」

雅也「本当ですか？」

佐代子「しかも、普通にスラスラ話してたし。とても直前までガチガチに緊張してたとは思えなかった」

山中「アドリブにしては、ちゃんと真面目でそれっぽいこと言ってたし」

雅也「緊張してて、自分が何話したのかも全然覚えてません」

佐代子「明日は今のところ浩太一人だけだし、日曜日は相手役にはっしーが来てくれるから、もう運営の仕事に専念してもらって大丈夫よ」

雅也「僕はそれが一番性に合ってます」

笑い合う一同。

つづく